

自然誌 だぶり

Natural history



三重自然誌の会情報誌 109号

2016年 9月

コグンカンドリが伊勢湾を周回しています

3年前にオオグンカンドリとの出会いを報告しましたが(本誌98号)、今回はコグンカンドリの記録です。8月中下旬にグンカンドリの目撃が津～明和の海岸で3例あり、シギやチドリを見る人たちは干潟だけでなく遠くの空や沖合にも双眼鏡を向けています。しかし、伊勢湾を周回しているらしく、海岸や河口周辺で飛翔している鳥に遭遇できるかどうかは全く運試しです。私は9月4日に出会ったのですが、台風12号が九州の西に停滞していたので南東の風がやや強くて曇り空でした。観察場所をどこにするかは賭けですが、この日は“山勘”で櫛田川河口から南へ向かいました。広い中州にサギが点々と見える堤防で休憩している時、松名瀬側の河畔林に向かって飛んでいる黒い鳥が目に入り、フロントガラス越しに双眼鏡で覗くとグンカンドリが林を越えていくのがかろうじて見えました。追いかけて出会えるかどうかは疑問でしたが飛び去った方向へ向かい、吹井浦の堤防に着いて櫛田川方面を見ていると雲を背景に飛翔するかすかな黒い影を見つけました。5分ほどするとグンカンドリがこちらに向かって飛んでいるのがわかり、数十秒で私たちの真上を通過して大きく旋回してあちこちに顔を向けて探索している様子で櫛田川河口方向へ戻っていきました。松名瀬付近から沖合にかけて何度も旋回しているのを観察することができて大満足でした。やがて北の方へ向かい、背後の雲に溶けこんで見えなくなりました。

写した画像と図鑑の写真を照合してコグンカンドリの幼鳥だと判りました。知人の目撃情報では前日の9月3日に雲出川河口に現れてカイトボードの間を飛んでいったそうです。また、9月5日夕方には香良洲沖を宮川河口方面へ飛んでいきました。いつまで滞在するか判りませんが、3年前の時は10月の観察だったので暫くは出会う可能性がありそうです。



2016年9月4日、松阪市松名瀬町で撮影

(今堀聖史：津市久居小野辺町1454-30)

オオサンショウウオー成長にともなうマイクロチップの移動について

竹澤 秀史

独立行政法人水資源機構川上ダム建設所（伊賀市）では、ダム建設事業により影響を受ける区域に生息しているオオサンショウウオを保全するために、平成8年度より松井正文先生（京都大学名誉教授）をはじめとする有識者の方々から指導・助言を得ながら調査・研究や保全対策の検討を行っている。

また、野外調査だけでは得られる情報に限界があるため、保護池を造り、文化財保護法の現状変更の許可を得て、保護した個体を飼育しながらオオサンショウウオの生態を観察してきた。この保護池は、保護した個体が生息していた河川沿いの、かつて田んぼであった所に設置し、施設内を流れる水もその川から引いて、できるだけ自然に近い環境を創出したものである。

また、飼育個体が逃げ出せないような対策を行っていたが、それでも大雨による増水などの際に行方不明になる個体があった。これらの行方不明個体のうち数個体は、その後、元棲んでいた河川で再捕獲されている。2016年6月15日、過去に保護池から行方不明になっていた1個体を河川で再捕獲したので報告する。

この個体は、幼生の生態を把握するために保護池で飼育していた個体である。1999年1月に巢穴下流の落ち葉だまりでまともに見つかった個体の1つで、大きさも4～5cmだったことから、1998年10月中旬に孵化し、巢穴から分散したばかりの幼生であると考えられる。すなわち、年齢(18歳)がわかっている貴重な個体といえる。本個体は、2005年5月に保護池から行方不明になったが、行方不明になるまでの約6年間に、個体識別を行うためのマイクロチップ(トローバン ID-162)の挿入を2つ行っていた。

最初は、2000年8月、全長約100mmのときに右腹部に挿入した(図1下)。その後、2003年11月、全長208mmのときに「特別天然記念物オオサンショウウオ保護管理指針」に基づき左肩にマイクロチップを挿入した(図1上)。このマイクロチップの挿入により、保護池での飼育期間中の個体識別が格段に容易となり、保護池内の各個体の生態を記録できるようになった。また、今回のように再捕獲

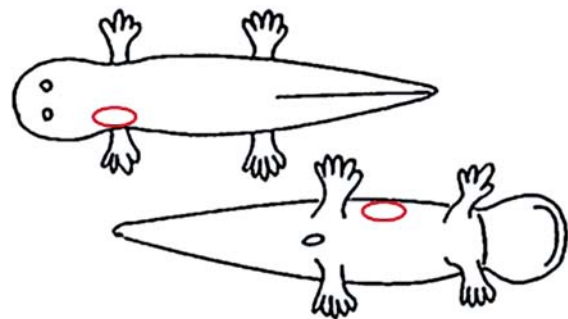


図1 マイクロチップの挿入部位



写真1 右腹部チップの位置



写真2 左肩チップの位置

時に個体の履歴をすぐに調べることができた。再捕獲時の個体の状況は、全長590mm、体重1,500gに成長しており、保護池で観察し続けていた個体に比べ小さめだが、肥満度は7.3と同程度であった。

また、右腹部と左肩部に挿入した2つのマイクロチップをマルチリーダー AREH 5で読み取りを行ったところ、右側前肢より後ろ（背中側）の上面から当てたときと左側前肢の上面から当てたときに反応があった。マイクロチップの位置をより絞り込むためにポケットマルチリーダー LID571で反応を見たところ、1つは右側腹部側面より下側から当てたときに（写真1）、もう1つは左側前肢より前（頭側）で上面から当てたときに反応した（写真2）。このような状況から、全長が約6倍に成長しても小さなおきに挿入したマイクロチップの位置は大きく変わらないということが確認できた。

この個体は、年齢がわかっている貴重なオオサンショウウオとして、今後の調査でも重要な情報を提供してくれることを願って再び河川へ放逐している。

最後に、当建設所の調査の一端を報告する場をご提供いただいた三重自然誌の会と清水善吉氏に感謝いたします。

（たけざわ ひでし：独立行政法人水資源機構川上ダム建設所）

松阪市日丘町八重田池周辺のチョウとトンボ

中西元男

日丘町八重田池は松阪市西郊の丘陵地（環境庁メッシュマップ5136-63-79）にあり、付近の住宅団地は清水（2014）によれば、35年前里山を造成したものといい、観察される動物としてツグミ、キジ、イシガメ、シロマダラ、チョウセンイタチなどを挙げている。

筆者は2014年に同地の昆虫につき簡単な調査を行ったので、その際得られたチョウ、トンボにつき記録しておく。調査の方法は任意採集、調査期間は2014年4月から12月まで月1～3回程度、1時間ほど現地を訪れた他、2015、2016年にも若干の補足調査を行った。チョウは筆者が同定所蔵、トンボは得られた標本を石田昇三氏に送り同定を仰いだ。お世話になった氏に感謝する。記録された種につき、種名、データ（1種につき1例）を以下に報告する。採集地、採集者は全て松阪市日丘町、中西元男のため略。

チョウ類

セセリチョウ科

ダイミョウセセリ 1♂2014年5月3日；チャバネセセリ 1♀2014年9月2日；イチモンジセセリ 1♀2014年8月29日

アゲハチョウ科

アオスジアゲハ 1♂2014年7月18日；キアゲハ 1♀2014年4月25日；アゲハ 1♂2014年4月25日；クロアゲハ 1♂2014年9月2日；モンキアゲハ 1♂2014年8月5日；ナガサキアゲハ 1♀2014年9月13日

シロチョウ科

キタキチョウ 1♀2014年4月1日；モンキチョウ 1♂2014年4月1日；ツマキチョウ 1♂2015年4月28日；モンシロチョウ 1♂2014年4月25日

シジミチョウ科

ムラサキツバメ 3L. 2014年8月29日（→9月17日2♀、19日1♂羽化、マテバシイより）；ムラサキシジミ 1♀2014年6月12日；アカシジミ 2♀2015年6月10日；ベニシジミ 1♀2014年4月1日；ヤ

マトシジミ 1 ♂ 2014年4月1日；ウラナミシジミ 1 ♂ 2014年10月24日；ルリシジミ 1 ♂ 2014年6月24日；サツマシジミ 1 ♂ 2014年11月4日；ツバメシジミ 1 ♂ 2014年4月1日；ウラギンシジミ 1 ♀ 2014年4月1日

タテハチョウ科

テングチョウ 1 ♀ 2014年4月1日；メスグロヒョウモン 1 ♀ 2014年9月2日；ツマグロヒョウモン 2 ♂ 2014年4月25日；コムスジ 1 ♀ 2014年8月5日；ヒオドシチョウ 1 ♀ 2014年4月1日；キタテハ 1 ♂ 2014年10月16日；ルリタテハ 1 ♀ 2014年4月1日；ヒメアカタテハ 1 ♀ 2014年10月16日；アカタテハ 1 ♀ 2014年11月4日；ゴマダラチョウ 3 L. 2014年12月23日(→死亡, エノキより)；ヒメウラナミジャノメ 1 ♂ 2014年7月7日；サトキマダラヒカゲ 1 ♂ 2014年5月19日；ヒメジャノメ 1 ♂ 2014年9月30日；コジャノメ 1 ♂ 2014年9月2日；クロコノマチョウ 1 ♂ 2016年4月30日

チョウ類は5科38種を記録した。以上の他に清水(2014)はアサギマダラを報じ、筆者は2012年7月27日同地採集のコチャバネセセリ 1 ♀ 標本を所持している。いずれも三重県中部低地、丘陵地に普通にみられる種で特記するものはない。ナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、サツマシジミは近年東北進分布拡大した種である。

トンボ類

アオイトトンボ科

ホソミオツネイトンボ 1 ♀ 2014年10月24日；オオアオイトトンボ 1 ♀ 2014年11月4日

カワトンボ科

ニホンカワトンボ 2 ♀ 2016年4月30日；ハグロトンボ 1 ♀ 2014年7月7日

イトトンボ科

クロイトトンボ 1 ♂ 1 ♀ 2014年6月24日；ホソミイトトンボ 1 ♀ 2014年9月30日；アジアイトトンボ 1 ♀ 2014年9月2日

ヤンマ科

ギンヤンマ 1 ♂ 1 ♀ 2014年8月5日

サナエトンボ科

ウチワヤンマ 1 ♂ 2014年7月18日；ヤマサナエ 2 ♀ 2014年5月3日

オニヤンマ科

オニヤンマ 1 ♂ 2014年9月30日

ヤマトンボ科

オオヤマトンボ 1 ♂ 2014年7月18日

トンボ科

チョウトンボ 1 ♂ 2014年7月18日；ナツアカネ 1 ♀ 2014年9月13日；ノシメトンボ 1 ♀ 2014年6月24日；アキアカネ 1 ♀ 2014年11月4日；ヒメアカネ 1 ♂ 2014年7月7日；マユタテアカネ 1 ♂ 2014年9月13日；マイコアカネ 1 ♂ 1 ♀ 2014年9月30日；ミヤマアカネ 1 ♀ 2014年11月4日；コシアキトンボ 1 ♂ 2014年7月7日；ショウジョウトンボ 1 ♂ 2014年6月24日；ウスバキトンボ 1 ♂ 2014年8月5日；シオカラトンボ 1 ♂ 2014年7月7日；シオヤトンボ 1 ♀ 2014年4月25日；オオシオカラトンボ 1 ♂ 2014年6月24日

以上トンボ類は8科26種を採集した。

文献

清水善吉(2014) 事務所で観察した生きもの。自然誌だより、(99)：4-5。

(なかにし もとお：松阪市新町959)

季節外れの紅葉－コナラ・常緑樹の紅葉－アカマツ

市川 正人

表題の現象はどちらも話題になって久しく、多くの方はすでにその原因をご存じだと思いますが、なかには紅葉と観る方もいるようなので紹介します。

どちらも昆虫を媒介にした樹木の立ち枯れで、前者の紅葉はコナラに限らずナラ・シイ・カシ類全般に及んでいます。朝日新聞(2016/8/23朝刊三重版)記事によると、三重県内では南北から始まり伊賀地区へと広がっているとのこと。枯れに至る詳しいメカニズムについてはお調べいただくとして、カシノナガキクイムシ(略称:カシナガ)が媒介するナラ菌による現象(通称:ナラ枯れ)です(写真1)。

カシナガは体長約5mm(雌:腹部先端が丸い,雄:腹部先端に突起がある)のコウチュウ類で(写真2)、幹に細く穿孔して侵入します。侵入点は樹幹のわずかな木屑の付着でわかります(写真3)。ターゲットは樹勢の衰えてきた老木が主で、成木や幼木の害は少ないようです。老木の増加要因の一つには、薪炭採取のための萌芽更新が行われなくなったことがあげられ、ナラ枯れはある面では人為現象とも言えます。なお、筆者は北勢地区でナラ枯れを目にしましたが、藤原孫太尾根の登山道沿いでは枯れたコナラの根もとに猛毒キノコで炎に見立てた名称のカエンタケ(主にミズナラ・コナラの枯れに発生)の群生も目にしました。キノコにとってナラ枯れは朗報かもしれません。

次に後者のマツ枯れは、マツ類を食害するマツノマダラカミキリ(コウチュウ類,体長約3cm)の媒介するマツノザイセンチュウ(センチュウ類,体長約1mm)が根から吸収した水や養分を通す管に詰まり、枯れに至る現象です。マツ類のなかでも公園や里山でアカマツの枯れを良く見かけます(写真4)。

両者の防除には、経費と労力が必要ですが、いくつかの物理的・科学的方法があるようです。最後に写真をご提供頂いた三重県民の森の榎田知穂氏と本会の清水善吉氏、県民の森のナラ・マツ枯れをご案内頂いた川根有機氏に記してお礼申し上げます。



写真1 ナラ枯れのコナラ。撮影:清水善吉



写真2 カシナガホイホイで捕獲したカシナガ(下と左端がメス,上と中央がオス)。撮影:榎田知穂



写真3 カシナガの穿孔口



写真4 マツ枯れのアカマツ。撮影:清水善吉

(いちかわ まさと:四日市市堀木1-4-5, 606)

イソヒヨドリの巣にイシクラゲが運ばれていた

今堀 聖史

イソヒヨドリは市街地や内陸へ分布を広げている種で、機会があれば育雛を観察したいと思っていました。餌運びや巣立ち雛を見たことはありますが、巣が作られていたのは建物の空調ダクトの中やビルの屋上施設など観察できない場所でした。5月中旬に全く予期しない場所でイソヒヨドリのメスが建物に入っていくのを見つけ、巣立ちまで観察することができました(写真1)。建物は使われていないバス停留所、ベンチの上にある小さな棚と屋根の木材が三角の空間になっている部分に巣を作っていました(写真2)。バスの巡回スペースと駐車場や公衆トイレがあり、週1回は物産販売所が店を開けるので人の出入りは多いですが、鳥に目を向ける人がいないのをイソヒヨドリは知っているようです。



写真1 巣立ち直後のヒナ



写真2 イソヒヨドリが巣をつくった場所のようす



写真3 イシクラゲを用いた巣

開けるので人の出入りは多いですが、鳥に目を向ける人がいないのをイソヒヨドリは知っているようです。

イソヒヨドリの営巣場所を見つけた時、巣はほぼ出来上がっていました。抱卵するまで刺激しない方がいいだろうと2週間後に確かめに行くと、淡青色の卵があって安心したのですが気になるものが写真に写っていました(写真3)。黒い不定形(大きさ3~5cm)の塊が産座の周りの巣材に点々とくっついていました。巣の周りに落ちていた小さな塊を手にとってみると乾いた海藻のような物でした。海から直線で20kmも離れた場所なので海藻はなく、思い当たるものが頭に浮かんできません。翌日、イソヒヨドリの営巣場所から2kmほど離れたトビの巣を見に行った時、道路わきの湿った草地にあるブヨブヨした藻を見て、イソヒヨドリの巣にあった黒い物体はこの藻だろうと直感しました。巣から拾ってきた塊を水に入れると乾燥ワカメを戻したようになり、草の茎数本を束ねて乗せておくと乾燥して草の茎に張り付いて糊のような役目をしています。イソヒヨドリが運んできた物体はイシクラゲと呼ばれる藻だと推定できました。調べてみると海岸堤防の海側にも生えている所があり、町中の公園や山里など至る所にあります。イソヒヨドリがいつもイシクラゲを巣材にするのか、来年も同じ場所に営巣してくれれば確かめたいと思っています。

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

鈴鹿市新田池の植物

市川 正 人

新田池（地元名称？）は、鈴鹿市山本町山本新田にある溜池で、鈴鹿山系を借景とした風光明媚なところに位置している。筆者はこれまで県内の多くの池を見てきたがこれほど浅い（満水期水深1.5m）皿池状溜池に出合ったことはない。毎年定期的に減水し、池内中央に敷設してある狭U字溝水路とその下手の水溜まり（渇水期で水深0.5m）を除いてほぼ干上がり、表層が粘土質で覆われた湿地になる池である（写真－1）。県内の多くの池が改修され、環境が大きく変わるなか、珍しく7種もの絶滅危惧種が安定して生育する池である。

池内植物としてはクサヨシ・キツネアザミ・ヌマトラノオ・ハイニガナ・ミゾカクシ・ミズトラノオ（国・県絶滅危惧種）・クロイヌノヒゲ（国・県絶滅危惧種）・イトイヌノヒゲ・ヒロハイヌノヒゲ・クロホシクサ（国・県絶滅危惧種）などが生育する（写真－2～4）。なかでも、ミゾカクシ・ヌマトラノオ・ミズトラノオ・クロイヌノヒゲの群生は素晴らしく、絶滅危惧種のミズトラノオやクロイヌノヒゲの個体数は県内で最も多いように思われる。

土手にはノカンゾウ（県絶滅危惧種）・タチカモメヅル（県絶滅危惧種）・コバノカモメヅル（県絶滅危惧種）が生育する（写真－5）。池の周りの林縁にはクロミノニシゴリ（県絶滅危惧種）・サワフタギ・キミズミ・オオカマツカなどが生育する（写真－6）。時期にもよるが、ノスリ・カモ類・アオサギやダイザギなどのサギ類が採餌・休息し、ミズトラノオの開花期には多くの昆虫類（主にアブ・チョウ・ガ類）が吸蜜に訪れる。



写真 1：落水後の溜池（新田池），2：ミズトラノオ，3：クロイヌノヒゲ，4：クロホシクサ，5：ノカンゾウ，6：クロミノニシゴリ

（いちかわ まさと：四日市市堀木1-4-5, 606）

なばなの里のオニバス

清水 善吉

オニバスは池沼に生育するスイレンの仲間で、8～10月に紫色の花を咲かせます。この植物の一番の特徴は1 m以上ときには2 mにもなる大きな葉を水面に広げることで、これは一見の価値があります。三重県指定の希少野生動物種で、桑名市や津市、志摩市で生育記録はあるものの、2004年に開花したのを最後に途絶えています（清水2015；県レッドデータブック2015）。

われわれも、消え去るのを座視していたわけではなく、一昨年（2014年3月30日）には休眠種子の発芽を促すために、桑名市多度町にあった生育地の用水路にでかけ、底にたまった泥をあげる作業をしてきました。こんな重労働を当然一人でするはずもなく、当会の山本和彦氏、市川正人氏にも声をかけて一緒に作業してもらいました。指定種を管轄する県部署のS氏にも来てもらったのですが、もっとも若いはずの氏が現場監督の役にまわったのは想定外でした（写真1）。

夏になり水路をオニバスの葉が埋め尽くすのを夢にまで見たのですが、残念ながら夢のままで終わってしまいました。あんな重労働を再度決行する元気は誰にも残されていないので、手をあぐねていたところ、この夏に嬉しい知らせがありました。なばなの里内にある池でオニバスがたくさん開花しているというのです。



写真1 現場監督の指示を仰ぐ山本・市川両氏、疲労の色は濃い

じつは、多度町のオニバスは系統保存のために地元有志により栽培されており、2004年春にその中からポット苗3株ずつを、長島町又木にある長島水辺やすらぎパーク内の運河と同町駒江のなばなの里の池に移植してもらいました。当時、筆者は県環境部に勤務しており、多度町教育委員会の石神教親さんと苗をもってお願いに行っただのがこの間のようなのです。前者は新芽がアカミミガメの食害にあい定着しませんでした。後者は増加して今年には139株を数えたそうです。

なばなの里の池は、コンクリート張りの人工池で水深は深いところでも1 mほどです。オニバスの生育は浅い池辺に限られており、そのためか葉は最大でも60cmほど多くは30cm前後しかありません。小型化の原因が水深の浅いことにあり、また、深いところは土壌が少ないので発芽しない可能性がありますので、秋に種子を採取して栽培し来春にポット苗を水深のある地点に移植する予定です。オニバスを見るためになばなの里にお客さんが列をなす夢を今夜はみたいと思います。



写真2 なばなの里のオニバス

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

編集後記

著者が固定化してきたように感じます。なにごとく“多様性”が必要ですので、皆様のご投稿をお待ちしています。次号は12月発行予定です（善）。

自然誌だより109号

発行日 2016年9月20日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp